

黄土高原ど真ん中の延川県土崗郷、黄河が大きく湾曲するところに伏羲河村と呼ばれる村があります。歴史的な伝承があるこの村は、住んでいる人は多いのですが土地は狭く、耕地は殆どありません。それで昔からずっと黄河の砂洲を利用して棗の木が植えられて来ました。有名な“灘棗(砂洲棗)”の産地です。

伏羲河村の人は全部「郭」姓を名乗り、「郭」姓も又いくつかに分かれていますが、古に遡れば全て伏羲氏に関わりがあるということです。“清道光本”(延川県志)には「古代、人類の始祖である伏羲氏がかってこの地に住んでいた。伏羲河村は清代以前は伏羲河村と呼ばれていたが“羲”と“义”の繁体字“羲”は形が似通っているののでいつの間にか“羲”を用いて表記するのが慣わしとなって今に至っている」と記載されています。

1997年以来これまでに私が伏羲河村を訪れた回数は数え切れません。村にはよく知っている子供たちが大勢おり、彼等の学習や生活環境など全てに亘って良く知っています。特に2001年4月から2003年5月の間、私は延川県文化局で仕事をする事になり、併せて当県の最僻地である郷鎮であり土崗郷の、しかもその土崗郷の最僻地の村落である伏羲河村を重点支援地として、私は毎月この村を訪れる事になったのです。子供たちの一挙一動が私の心を刺激し、子供たちの行動や言動、思いや願いの全てを私のカメラのレンズを通して、外界の友人達に知らせたいと思うようになりました。

伏羲河村は土崗郷の役所から20キロメートル以上離れ、途中いくつも丘や谷を越えなければなりません。大人が徒歩で往復するのでもかなりの労力ですから、まして12、3歳の女の子達にとってはいかばかりでしょう。

実は、土崗郷全体で完全小学校(1年生から6年生まで全学年が揃う小学校のこと)は一箇所しかないのです。子供たちはそれぞれの村の小学校で2年生(村によっては3年生)まで勉強し、その後は郷の小学校に寄宿し勉強をすることになります。毎週、子供たちは教科書ばかりでなく、一週間分の食事——ずっしりと重い酸菜(漬物)と一週間分、9回の食事(1日当たり2食4日分と金曜日朝の食事用。金曜日の午後は帰宅——を背負って学校へ通うことになるのです。寒さ厳しかろうと焼け付く暑さであろうと、風が吹こうと雨が降ろうと、毎週繰り返されることなのです。

土崗郷では私はそんな子供たちによく出会います。みんなほほを真っ赤に染め、息をはあはあさせて道端にしゃがみ込んで休んでいたります。かわいそうなのは3年生になったばかりの11、2歳の子どもたちで、泣こうにも声も出ない様子です。

私は子供たちと一緒に学校まで歩き、学校に通う子供たちの途中の様子を記録しようと決めました。そして、よく知り合っている伏羲河村の子どもたちを撮影の対象に選びました。

2003年3月2日は子供たちが学校に戻る日です。夜が明けると私は先ず小芳の家に行き、「学校に行くときは必ず声を掛けてね」と念を押してから、私は安心

して村の中を巡りました。というのは、私は前日、小芳、芳芳、慶慶の家を訪ね、彼女達が学校に行く前の準備をしている写真を撮影し、一緒に行く伝えておいたからです。この子供たちは皆、私が数年に亘って撮影して来た子供たちですが、この子供達が伏羲河村小学校を終えて郷の小学校に行くように



伏羲氏的后代。

なった後の写真がありません。

午前9時前に朝飯を食べ(ここでは1日2食です)ましたが連絡がきません。それで私は船つき場でお喋りでもしようと出かけ、今回の目的は子どもたちが学校に行く様子を撮影することだと伝えますと、おばあさんが「学校に行く子はもうとっくに家を出て今頃は土崗に向っちゃってるよ」と言うではありませんか。

時計を見ると9時前です。入り口で待ちましたが誰も私を呼びに来ません。心配していると丁度何人かの子どもたちが朝ご飯を済ませて学校に行くのに出会い、その中に慶慶の妹もいました。訊くと「慶慶たちはもう出かけたよ」という答えが帰ってきました。私は瞬時ぼかんとあっけにとられ、すぐ面白くない事態になったことを知りました。子ども達の通学の姿を撮影にわざわざ来たというのに収穫なしで戻るわけには行きません。

私は慌てて小芳の家に行き、庭にも着かないうちから大声で小芳を呼びますと、窑洞の中から、「子供たちは1時間ほど前に出発したよー」という返事です。頭の中が真っ白になりました。何日も掛けてあれこれ計画を練ったというのに一瞬のヘマで大切な機会を失ってしまったのです。

後悔している場合ではありません。直ぐ家に駆け戻り、カメラやビデオを背負うと、家主に「私は一足先に行く。一緒に行く仲間が来たら私のリュックと三脚を背負って追いかけて欲しい」と伝言を頼みました。話しながらも入り口を飛び出し、三步の距離を二歩に、そして小走りで走り出しました。

近道を選び、がけ道を抜け山を走りました。疲れが足から力を奪い、息が切れます。試しに几声か大声で呼んでみましたが返事はありません。みんな遠くに

行ってしまっているのです。若し彼等が‘捷路砭’と呼ばれている切り立った崖道の古栈道を通り抜けていたら、今回撮影しようとしている一番精彩のある部分を失ってしまい、全行程追跡撮影の意義は大打撃を受けてしまいます。

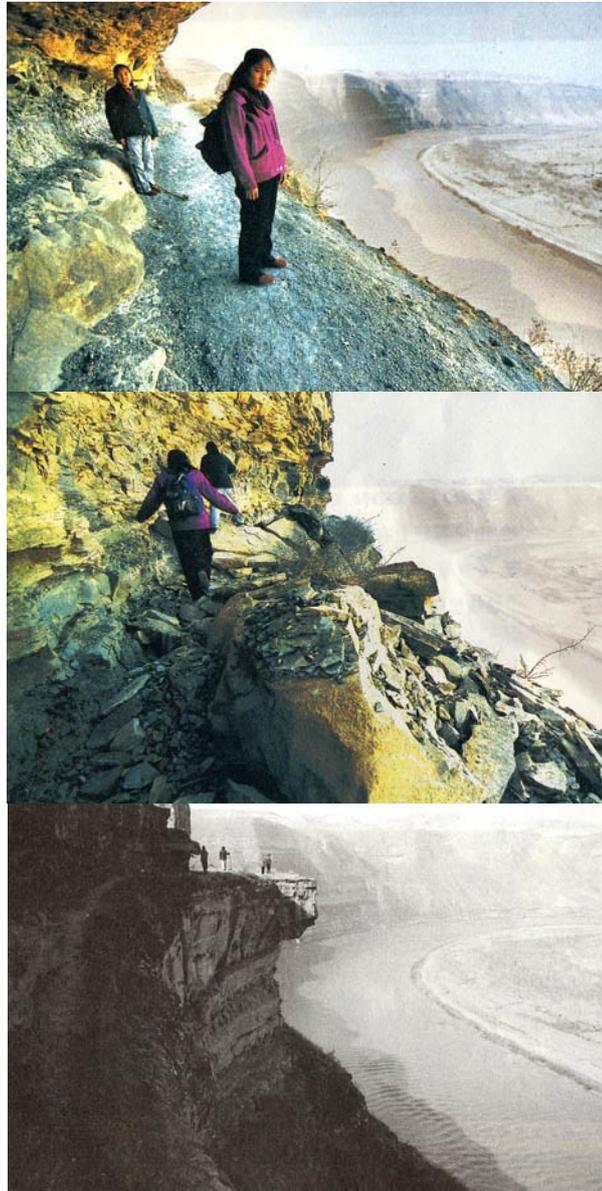
私は息を弾ませて追いかけ、遂にもう直ぐ山の頂というところでこちらに向って駆けてくる男の子に出会

いました。私は救いの星に出会ったように大声で彼を呼び、前方に行く子供たちに停まるように叫ばせました。しかし、男の子は「もう遠くまで行ってしまっているのだから見えない」と言い、家に鍵を取りに戻るところだそうで飛ぶように走って行きます。自分の散々な苦勞の様を思うにつけなんと羨ましいことか!年齢はどんな人も見逃さないのだとため息をつくばかりです。

両足を引きずり上げてやっと山の頂上に出ると、頂は広く広がって平坦な道が続き走れるようになりました。しかし私は両足に鉛を注ぎ込んだようで動かすのさえやっとなです。どこに走る気力があるといえるでしょう?歯を食いしばって大急ぎで歩くしかありません。

幸い3回曲がり角を廻ったところで二人の子どもの後姿が見えました。私は大

声で「停まって!」と叫び、近づいて見るとそれは翩翩の二人のお姉さんで彩琴と転琴でした。転琴は木の枝を杖にしています。朝、小芳の家を訪ねて行ったとき、小芳のお母さんが、風邪を引いて頭が痛いからとこの子のお尻に注射を打っていたのを思い出しました。街に住んでいればこの子は今日はきっと休んだに違いありません。しかし、ここでは我慢するしかないのです。皆と一緒に学校に行かなければ間違いなく1週間の学



岩の壁と黄河にはさまれた崖道に行く



習過程に遅れが生じてしまいます。

やっと‘捷路砭’に差し掛かり、遂に二段になった‘捷路砭’の入り口辺りに石の崖路をゆっくり歩く幾人かの人影がかすかに見えてきました。彩琴は目ざとく、彼等は慶慶、芳芳たちだと見分けました。私は直ぐ大声で呼ばわり、子供たちは遂に停まりました。‘捷路砭’に入る時、彩琴と転琴は「怖い！回り道をして車道を行きたい」と言いました。

実は、私も内心、びくびくものでしたが無理に心を奮い立たせて「大丈夫。私に付いておいで」と言い、先頭に立って薄暗く湿った石の棧道を進んで行きました。道幅は1メートルもなく砕けた石がごろごろしており、片側は切り立った崖、もう一方は万丈の淵、しかもこのでこぼこ道は外側に傾斜してはおりませんか。

足の下には黄河の流れがとうとうと逆巻き、氷の塊がどどどどんと音を立てて上流から流れ来ては、いつでも仲間になろうよと誘っているかのように、流れ去って行きます。足から力が抜け、眼がチカチカします。少しでも注意を怠れば転げ落ちて身体も骨も砕け散ってしまうでしょう。私は外側を見る勇気がなく、ちらりと眺めては心胆震え上がり、眼はひたすら内側を見るようにし、身体も内側に傾けて歩きました。

しばし歩いて路がやや広くなってから、二人の子どもを呼んで先に行かせ、自分は後ろに廻りました。私の仕事は撮影することで、探検に来たのでも、刺激を求めてきたのでも勇気を鍛えるために来たのではないのです。

遂に一つ目の‘捷路砭’を通り過ぎました。二つ目は一つ目の道より更に危険で、子供たちは入り口のところで待っています。退却は出来ません。歯を食いしばってでも行かなければなりません。

路面は風化した小石が一面に散らばって、一歩ずつ確実に足を踏み出さなければ転んでしまうでしょう。

若しここで転んだら笑い事ではありません・・・・・・最も緊張を強いられるところは石崖が道の上に低く垂れ下がったところで、ここでは高貴の人でも身体を前に屈めて進まなければ通れません。

見ると子供たちはなかなかで、猫背にもならず、身体を外側に傾け、まるで猿のようにするすると潜り抜けて行きました。身軽ですばしこくまるで黄河の上空に弧線を描いて路か小道があるかのようです。

私は写真を取りながら進み、時には子どもたちと距離を置いたり、また子供たちを大声で呼んで立ち止まらせたりしては狙いを定め、カメラを構え撮影しました。実は息が切れるので、写真撮影するといっ一息入れ元気を取り戻そうという魂胆なのです。

事ここに至れば、いかんせん腰を丸め、膝を曲げ、屈みこみ、歩幅を小さく、ゆっくり進んでいくしかありません。崖の上で私が辿り着くのをずっと待っている子供たちの笑いさざめく声が耳に聞こえてきます。「怖がってらあ、怖がってらあ」。中でも慶慶の声は一際高く響いています。

‘捷路砭’を通り抜け、私は久々に石崖の上の平坦なところに出て呼吸を整え、気持ちも落ち着かせることが出来ました。とうとう子供たちの大隊に追いついたのです。とても嬉しくはありましたが、子どもたちに恨み言の一つも言いたくなります。

「一緒に行くって言ったでしょう。どうして出発する時知らせてくれなかったの？」しかし、子供たちは私が彼等と一緒に学校に行くなんて“誑哩”(冗談の意)だから、ほんとだと思わなかったといひます。外から来た人間が何で子どもといっしょに学校まで歩いてゆくの、子供も親も分からなくて当然です。40里(約20 km)もある山道です。村の大人達もあまり歩かないというのに、街から来た役人が歩くはずがあるでしょうか？(田井訳)